二言語併用児の言語干渉に関する研究

——朝鮮学校の生徒・学生の場合——

金 徳 龍*

A STUDY OF LINGUISTIC INTERFERENCE IN BILINGUAL CHILDREN

——a case of students in a korean school——

Dongryong Kim

This is a psychological study of "linguistic interference" between Korean and Japanese found among students attending a korean school. This study examined the degrees of linguistic "independence" and "dependence" between the two languages by "color-naming test". The results were as follows : (1) Either of the two languages became a predominant language ; (2) The degree of linguistic interference between the two languages was not considered high ; (3) A relatively stronger influence was given on linguistic interference in bilingualism when the second language began to be learned rather than by the length of its study.

Key words : bilingual children, color-naming test, linguistic interference between korean and Japanese, time or age for beginning korean national education.

問 題

現在の在日朝鮮人子女に対する民族教育は日本で生まれ育つ3～4世が対象とされている。かれらは日本語を第1言語として習得した後に、第2言語としての朝鮮語を教育機関を通して学んでいる。

在日朝鮮人の民族教育は本質的に朝鮮語と日本語による2言語併用教育である。したがって、この教育を通してこどもたちは確実にバイリンガルに育っていると考えられる。

本研究では朝鮮語と日本語との言語的な干渉現象を観察することによって、この2つの言語の相互的な反応の競合の程度をとらえようとした。また、これによって民族教育の年数と開始時期とを相関させながら被験者がバイリンガルか第2言語「使用者」かをも考察した。

方 法

バイリンガルの習得された言語の「独立性」と「依存性」の程度を調べる実験的な方法に「色彩命名テスト (color-naming test)」がある。このテストは2言語併用過程での「言語干渉」を実験的に観察することを可能にする。また、このテストは色彩名とは異なる色彩で示されているカード (例=あか色で「あお」と示す) を用いて色の命名に要する時間が測定される。その際、「言語干渉」のために習得度合いの高い言語ほどその時間は多くかかるようになる。

本研究では、芳賀(1979, 1984)が使用した方法を朝鮮語と日本語で再構成したものを使った。それは、3種類の色彩(あか、あお、くろ)を40個ずつ配列したカードとして提示されるものである。そのカードは「色彩カード」、「朝鮮語色彩文字カード」、「日本語色彩文字カード」の3枚である。

このカードの作成において留意した点は、朝鮮語と日本語間で色彩名の音節数を同じになるようにした点

* 朝鮮大学校(Korea University)

である。本研究で使用した「あか (aka) → 불음 (pulgum)」, 「あお (ao) → 푸름 (purum)」, 「くろ (kuro) → 검음 (komum)」と色彩名では2言語間の音節数は変わらない。しかし、ここでの日本語は開音節であり朝鮮語は閉音節である。

したがって、朝鮮語の pulgum (あか) は「l・m」, purum (あお) では「m」, komum (くろ) でも「m」というように「終声 (朝鮮語では받침 (patchim) という日本語の促音(っ), 撥音(ん)に近いもの)」がどうしても関わってくる。それだけ朝鮮語の方が読み時間の上でやや時間がかかる。しかし、その差はほとんど問題とはならないと考えられる。

本テストは色名を言うのに要する時間 (反応速度) を測定するところに意義がある。

反応速度の測定はつぎのように行った。

まず、それぞれ40個の刺激が提示されているテスト用紙を「色彩カード」, 「朝鮮語色彩文字カード」, 「日本語色彩文字カード」の順に被験者に示し, 「色彩カード」は色名, 「文字カード」は文字の意味ではなく, その色を左から右の方向 (計4段) にできるだけ早く言うようにした。途中で間違った場合には即座に修正させ, 続けて読んで行くようにした。そして, 第1言語 (日本語) による「色彩カード」を言うのに要した時間を100とし, それを基準として「朝鮮語色彩文字カード(KS)」の朝鮮語読み (KR) に要した時間を数値化 (「言語/色彩」値) した。

また, 言語内干渉の測定はそれぞれの言語による色彩カードを言うのに要した時間を基準として各「S (刺激) - R (反応)」を数値化して表わした。

被験者は本研究と同時にに行った「朝・日語彙理解力テスト (芝-1980-の日本語語彙理解力に関する調査項目に沿って再構成して実施)」 (金, 1988) の被験者・965名の中から任意に選んだ初級部 (小学校) 4年から朝鮮大学校3年までの85名の在日朝鮮人子女である (TABLE 1)。また, 比較分析のために日本の大学生, 在日南朝鮮留学生のデータ (芳賀, 1979) も利用した。

テストは1988年6月から7月にかけて各学校で個人面談形式で行った。

結果と考察

テストを通じて得られたデータは被験者が民族教育を受け始めた時期とその期間, 第1及び第2言語別に反応時間を(%)に変えて比較することによって考察した。

TABLE 1 被験者数 (名)

学 校	学年	人数	男子	女子
初 級	4	14	7	7
	5	10	5	5
	6	10	4	6
		34	16	18
中 級	1	7	4	3
高 級	1	8	4	4
	3	9	6	3
		17	10	7
大 学 校	2①	7	0	7
	2②	14	0	14
	2③	6	5	1
		27	5	22
総 数		85	35	50

注1) 大学2①=教育学部・保育科

大学2②=教育学部・師範科

大学2③=日本高校からの編入生

被験者の民族教育の開始時期はTABLE 2のようになる。

もっとも多くみられるのは, 初級部1年からの44.8%, つぎに幼稚班 (幼稚園) からの36.6% (年長=7.1%, 年中=15.3%, 年少=14.2%) である。これは被験者の81.4%が満4歳から満7歳という幼児期後半から民族教育を通して朝鮮語を習得し始めていることを示す。そして, その大部分が言語発達の上で特別な意味を持つ言語形成期としての幼児期及び児童期初期に, 日本語と共に朝鮮語の習得を始めていることを示す。

テストの結果はつぎのようになった。

1. 「言語/色彩」値

「言語/色彩」値とは, 各被験者の第1言語 (日本語) の色彩カードを言うのに要した時間を100として, それを基準に計算した第2言語 (朝鮮語) の色彩カードを言うのに要した時間の値である。これによって2言語間における言語の相対的な「優位性」, 「独立性」を求められる。すなわち, この値が小さなものほど第2言語の習熟度が相対的に高いということである。

テスト結果を民族教育の年数という視点でみたものがTABLE 3である。

民族教育の年数が1年3か月という被験者たちの「言語/色彩」値 (170.4) は他の年数別被験者のそれぞれの値とは明確に区別される。この170.4という値は総平均値 (122.5) よりも47.9大きい。この両者間における

TABLE 2 被験者の民族教育開始時期別人数

			民 族 教 育 の 開 始 時 期														
学校・学年		被験者数	幼 稚 班			初 級 部					中級部		高級部		大学校	民族教育平均年数	
			年少	年中	年長	1	2	3	4	5-6	1	2-3	1	2-3	1		
テスト時の学校・学年	初級	4	14名	2	2	1	8	1	0	0							3：11
		5	10	1	0	0	8	1	0	0	0						4：04
		6	10	2	3	0	5	0	0	0	0						7：00
	中級	1	7	1	0	3	3	0	0	0	0	0					6：10
		1	8	3	1	2	2	0	0	0	0	0	0	0			10：06
	高級	3	9	1	1	0	6	0	0	0	0	0	0	1	0		10：10
		2①	7	0	1	0	1	0	0	1	0	0	0	2	0	2	7：01
	大学	2②	14	2	5	0	5	0	0	0	0	1	0	1	0	0	13：02
		2③	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	2：06
	平均		85	12	13	6	39	2	0	1	0	1	0	4	0	8	7：04

(年:月)

差は有意であった。 $(t=7.34>2.26=t_{22} (0.05))$ 。

このように「1年3か月」の被験者たちは全体からみて非常に特異な存在となっている。したがって、「言語/色彩」値に影響を及ぼすと考えられる民族教育の年数は、本研究においては1年3か月から2年3か月のあいだであるといえよう。「1年3か月」の被験者たちは、本来的な意味でのパイリンガルではなくて第2言語「使用者」という側面の方が強いと思われる。

しかし、これらはどこまでも民族教育の年数だけからとらえたものである。ここで提起される問題は、第2言語の習得年数が同じであってもその言語の習得を開始した年齢期が異なれば「言語/色彩」値も異なるということである。

この現象はTABLE 4の初級部6年と朝鮮大学校2年①(教育学部・保育科)の被験者間でみられる。初級部6年の被験者たちの民族教育年数(平均 満7年)と、大学2年①の年数(平均 満7年1か月)間には満1か月の差しかない*。しかし、この2集団の「言語/色彩」値は大学2年①(131.1)に比べて、初級部6年(109.5)の被験者たちが21.6も相対的に小さい値であった。この差は有意であった $(t=9.90>2.26=t_{83} (0.05))$ 。

このような差は、初級部6年の被験者たちの100%が民族教育を幼稚園か初級部1年から受け始めているの

TABLE 3 民族教育年数と「言語/色彩」値

教育年数 年:月	男女計		男子		女子	
	人数	平均	人数	平均	人数	平均
1:03	8	170.4	5	187.1	3	142.3
2:03	2	118.2	2	118.2	0	÷÷
3:03	9	117.2	5	117.8	4	116.4
4:03	12	121.7	4	113.7	8	125.7
5:03	8	118.2	4	127.1	4	109.3
6:03	5	127.8	3	144.8	2	102.2
7:03	7	123.2	3	141.3	4	105.2
8:03	3	111.5	1	108.1	2	114.9
9:03	3	111.3	2	123.9	1	86.2
10:03	3	118.7	1	124.5	2	115.8
11:03	6	124.9	4	130.2	2	111.5
12:03	3	105.9	0	÷÷	3	105.9
13:03	7	111.4	0	÷÷	7	111.4
14:03	1	99.2	1	99.2	0	÷÷
15:03	6	112.4	0	÷÷	6	112.4
16:03	2	112.5	0	÷÷	2	112.5
総平均	85	122.5	35	134.7	50	113.9
SD値		27.9		36.3		14.9

に対し、大学2年①のその比率は28.6%に過ぎないことと関連するものと考えられる。

民族教育の開始期が「言語/色彩」値に影響を与える

* 本研究と並行して行なった「在日朝鮮人子弟の言語生活に関する意識調査(1988)」においてこの傾向をみることができる。

TABLE 4 被験者の民族教育開始期別比率の比較

民族教育 開始期	テスト実施時の学年			
	初級部 6年		大学 2年①	
	人数	%	人数	%
幼稚班 年少	2	20.0	0	0.0
幼稚班 年中	3	30.0	1	14.3
幼稚班 年長	0	0.0	0	0.0
初級部 1年	5	50.0	1	14.3
初級部 4年	0	0.0	1	14.3
高級部 1年	0	0.0	2	28.6
大学校 1年	0	0.0	2	28.6

TABLE 5 民族教育開始時期別「言語/色彩」値

	民族教育開始期 (発達段階)		「言語/色彩」値		
				男	女
幼児期	満4歳 ～満7歳	幼稚班	114.4	126.4	109.5
		初級1	119.6	126.1	113.7
			117.2	126.2	111.5
青年期	満16歳 ～満19歳	高級1	137.6	152.8	132.6
		大学1	170.3	187.1	142.3
			159.4	187.4	137.4
	(±)		+42.1	+55.1	+25.9

注1) (±) は幼児期を基準とする。

TABLE 6 第二言語の習得開始期ごとの「言語/色彩」値 (習得年数別)

	年 : 月	人数	習 得 開 始 期								
			幼			初			中	高	大
			年少	年中	年長	1	2	4	1	1	1
習 得 年 数	1 : 3	8	*	*	*	*	*	*	*	*	170.4 (8)
	2 : 3	2	*	*	*	*	83.6 (1)	*	*	152.8 (1)	*
	3 : 3	9	*	*	*	119.1 (8)	102.1 (1)	*	*	*	*
	4 : 3	12	*	*	119.2 (1)	117.9 (8)	*	*	*	132.5 (3)	*
	5 : 3	8	*	126.6 (2)	*	115.4 (6)	*	*	*	*	*
	6 : 3～ 7 : 3	12	98.6 (3)	114.1 (3)	150.6 (2)	*	*	*	99.7 (1)	*	*
	8 : 3～ 9 : 3	6	92.6 (3)	139.9 (1)	*	123.8 (2)	*	*	*	*	*
	10 : 3～ 11 : 3	9	*	*	116.7 (2)	122.3 (6)	*	122.6 (1)	*	*	*
	12 : 3～ 13 : 3	10	105.8 (3)	108.8 (1)	*	111.8 (6)	*	*	*	*	*
	14 : 3～ 15 : 3	7	99.2 (1)	112.4 (6)	*	*	*	*	*	*	*
年 数	16 : 3	2	112.5 (2)	*	*	*	*	*	*	*	*
	平 均	85	99.9 (12)	120.4 (13)	132.5 (6)	122.9 (30)	92.9 (2)	122.6 (1)	99.7 (1)	142.6 (4)	170.4 (8)

注1) () = 被験者数

という傾向は、同じ大学2年である①と②（教育学部・師範科）の被験者たちの間でもみられる**。2年①（109.5）が①よりも「言語/色彩」値が21.6小さい。これは、2年②の方が①よりも朝鮮語「優位」であることを示すものである。この2集団の民族教育を幼稚園か初級部1年から受け始めた被験者の比率差は57.2%（①=85.2%，②=28.4%）であった。

このことは、全被験者を第2言語の習得開始期別に「幼児期集団」と「青年期集団」とに分け、「言語/色彩」値を比較することによってうらづけられる（TABLE 5）。「幼児期集団（117.2）」は「青年期集団（159.4）」よりも42.1の値で朝鮮語「優位」である。

このように本研究の場合、第2言語の習得年数（量）よりもその言語の習得開始期（年齢期的な適合性）に関する事柄の方が、バイリンガルの発達的な規定要因として相対的に重要であると考えられる。それは、第2言語の習得年数別にみた習得開始ごとの「言語/色彩」値を比べてみてもわかる（TABLE 6）。

ここでも基本的に同じ習得年数であっても、その習得開始期が初期であるほど第2言語の習得度は高くなっていることが示された。

つぎに、学校・学年別に「言語/色彩」値を示したものがTABLE 7からTABLE 10である。

学校別に朝鮮語の習得度合いが高い順は、初級部（112.5）、高級部（118.3）、大学校（120.0）、中級部（134.9）であった。

これを被験者集団別（学年）でみると、大学2年②（109.5）と初級部6年（109.5）がもっとも小さい値を示

R \ S	朝鮮語	日本語	平均	色彩
朝鮮語	46.87	47.75	47.31	34.92
	151.53	154.38	152.95	112.90
日本語	37.52	47.64	42.58	30.93
	121.30	154.02	137.66	100.00
平均	42.19	47.69	44.94	32.93
	136.40	154.18	145.29	106.46

R \ S	朝鮮語	日本語	平均	色彩
朝鮮語	43.52	43.71	43.61	32.31
	147.57	148.21	147.88	109.56
日本語	38.06	48.90	43.48	29.49
	129.09	165.84	147.47	100.00
平均	40.79	46.30	43.55	30.90
	138.31	157.00	147.67	104.78

R \ S	朝鮮語	日本語	平均	色彩
朝鮮語	49.09	49.35	49.22	36.61
	150.95	151.75	151.35	112.57
日本語	38.85	50.65	44.75	32.52
	119.46	155.75	137.60	100.00
平均	43.97	50.00	46.98	34.56
	135.20	153.75	144.21	106.27

注1) は「言語/色彩」値（以下同じ）
注2) 各数値の単位は上段が秒，下段が指数である。
注3) S=刺激カード，R=反応言語

TABLE 7 初級部の「言語/色彩」値

R \ S	朝鮮語	日本語	平均	色彩
朝鮮語	56.88	56.61	56.74	42.62
	153.06	152.34	152.69	114.71
日本語	40.97	55.43	48.20	37.16
	110.26	149.18	129.72	100.00
平均	48.93	56.02	52.47	39.89
	131.67	150.75	141.20	107.34

4
年
生

TABLE 8 中級部の「言語/色彩」値

R \ S	朝鮮語	日本語	平均	色彩
朝鮮語	44.93	38.74	41.84	31.15
	194.67	167.85	181.12	134.96
日本語	31.82	42.09	36.96	23.08
	137.86	182.36	160.13	100.00
平均	38.38	40.42	39.40	27.12
	166.29	175.12	170.71	117.50

1
年
生

** 2年①は教育学部・保育科の学生，②は同学部・師範科の学生である。①と②に分けた理由は、本研究以前に行った別のテスト（「朝・日語彙理解力テスト」）での被験者集団の単位と同じようにする為である（そうすることによってこの2つのテスト結果の比較分析を可能にした）。

している。
しかし、大学から朝鮮語の習得を始めた2年③（日本高校からの編入生集団）の場合、その値（181.8）はもっとも

TABLE 9 高級部の「言語/色彩」値

1 年 生	R \ S	朝鮮語	日本語	平 均	色 彩
	朝鮮語	31.01	32.89	31.95	24.52
		146.27	155.14	150.70	115.66
	日本語	24.45	31.65	28.05	21.20
		115.33	149.29	132.31	100.00
	平 均	27.73	32.27	30.00	22.86
		130.80	152.21	141.50	107.83

3 年 生	R \ S	朝鮮語	日本語	平 均	色 彩
	朝鮮語	31.02	28.01	29.52	21.99
		171.47	154.83	163.18	121.55
	日本語	21.64	30.22	25.93	18.09
		119.62	167.05	143.33	100.00
	平 均	26.33	29.12	27.73	20.04
		145.55	160.97	153.28	110.77

高 級 平 均	R \ S	朝鮮語	日本語	平 均	色 彩
	朝鮮語	31.01	30.45	30.73	23.25
		157.89	155.04	156.46	118.38
	日本語	23.04	30.93	26.99	19.64
		117.31	157.48	137.42	100.00
	平 均	27.03	30.69	28.86	21.45
		137.62	156.26	146.94	109.21

TABLE 10 大学校の「言語/色彩」値

2 年 生 ①	R \ S	朝鮮語	日本語	平 均	色 彩
	朝鮮語	33.25	31.02	32.14	26.55
		164.27	153.26	158.79	131.17
	日本語	24.32	29.34	26.83	20.24
		120.15	144.96	132.55	100.00
	平 均	28.79	30.18	29.48	23.40
		142.24	149.11	145.65	115.61

大きいものであった。これらは、民族教育段階の上昇とともに基本的（本研究では中級部を例外として）には朝鮮語の習得度合いが高まっていることを示すものである。

全被験者の81.4%が幼稚園と初級部1年から民族教育を受け始めていることから、学校・学年という朝鮮

2 年 生 ②	R \ S	朝鮮語	日本語	平 均	色 彩
	朝鮮語	30.69	27.90	29.14	23.56
		142.67	128.31	135.47	109.53
	日本語	26.63	31.77	29.20	21.51
		123.80	147.69	137.75	100.00
	平 均	28.66	29.68	29.17	22.54
		133.24	137.98	135.61	104.78

2 年 生 ③	R \ S	朝鮮語	日本語	平 均	色 彩
	朝鮮語	46.88	40.92	43.93	39.01
		218.55	190.76	204.66	181.86
	日本語	25.96	30.64	28.30	21.45
		121.02	142.84	131.93	100.00
	平 均	36.42	35.78	36.10	30.23
		169.79	166.80	168.29	140.93

大 学 平 均	R \ S	朝鮮語	日本語	平 均	色 彩
	朝鮮語	31.97	29.31	30.64	25.05
		153.18	140.44	146.81	120.02
	日本語	25.47	30.55	28.01	20.87
		122.04	146.38	134.21	100.00
	平 均	28.72	29.93	29.32	22.97
		137.61	143.41	140.48	110.06

注1) 大学2-③=日本高校からの編入生集団

注2) 大学平均=2-①と2-②の平均（2-③は除外）

語教育の年数と開始時間とは密接に関連しあっていると考えられる。

2. 言語干渉

言語干渉の程度は、それぞれの言語内での干渉と第1及び第2言語間での干渉とは異なることが指摘されている。

本研究での被験者の特徴は、言語内干渉が言語間干渉よりも相対的に大きいということである。これはすべての被験者に共通している。すなわち、ここでの被験者の第2言語の習得の度合いが第1言語に比べて相対的に低い水準にあることを示すものであろう。

a. 言語内干渉 言語内干渉の程度は、朝鮮語刺激(KS)－朝鮮語反応(KR)と日本語刺激(JS)－日本語反応(JR)のように刺激と反応が同一言語からなるテストを行い、それぞれの値を比較することによって測定

した (TABLE 11)。

被験者の言語内干渉における一般的傾向は、朝鮮語

よりも日本語内干渉の程度の方が大きいということである。つまり日本語が第1言語だということである。

TABLE 11 言語内干渉の対比

学 校	初 級			中 級	高 級		大 学 校		
学 年	4	5	6	1	1	3	2-①	2-②	2-③
KS-KR	56.8	46.8	43.5	44.9	31.0	31.0	33.2	30.6	46.8
	153.0	151.5	147.5	194.6	146.2	171.4	164.2	142.6	218.5
JS-JR	47.7	47.6	48.9	42.0	31.6	30.2	29.3	31.7	30.6
	149.1	154.0	165.8	182.3	149.2	167.0	144.9	147.6	142.8
(±)	+ 9.1	- 0.8	- 5.4	+ 2.9	- 0.6	+ 0.8	+ 3.9	- 1.1	+16.2
	+ 3.9	- 2.5	-18.3	+12.3	- 3.0	+ 4.4	+19.3	- 5.0	+75.7

注1) KS-KR=朝鮮語刺激-朝鮮語反応

JS-JR=日本語刺激-日本語反応

注2) 統計の上段=秒, 下段=「言語/色彩」値

注3) (±)=朝鮮語 (KS-KR) を基準とする。

TABLE 12 言語間干渉の対比

学 校	初 級			中 級	高 級		大 学 校		
学 年	4	5	6	1	1	3	2-①	2-②	2-③
KS-JR	41.0	37.5	38.1	31.8	24.5	21.6	24.3	26.6	26.0
	110.3	121.3	129.1	137.9	115.3	119.6	120.1	123.8	121.0
JS-KR	56.6	47.8	43.7	38.7	32.9	28.0	31.0	27.6	40.9
	132.8	136.7	135.3	124.4	134.2	127.4	116.8	117.2	104.9
(±)	-15.6	-10.3	- 5.6	- 6.9	- 8.4	- 6.4	- 6.7	- 1.0	-14.9
	-22.5	-15.4	- 6.2	+13.5	-18.9	- 7.8	+ 3.3	+ 6.6	+16.1

注1) KS-JR=朝鮮語刺激-日本語反応

JS-KR=日本語刺激-朝鮮語反応

注2) 統計の上段=秒, 下段=「言語/色彩」値

注3) (±)=KS-JR を基準とする。

FIG. 1 言語間干渉 (「色彩と言語」値)

朝鮮語内及び日本語内干渉の変動線はその言語干渉の程度において日本語の方が大きいことに加えて、その変動パターンがほとんど同じであることが示された。

b. 言語間干渉 言語間干渉は刺激と反応の言語が互いに異なるときにその2言語間で生じる干渉である。

本研究でみられる傾向は、「KS-JR」が「JS-KR」に比べて全般的にその反応速度が早いということである (TABLE 12, FIG. 1)。この傾向が最も顕著なのが初級部4年の被験者集団である。この集団は「KS-JR (41.0秒)」よりも「JS-KR (56.0秒)」の方が15.6秒も多く時間を要している。

このように反応言語が朝鮮語の場合に反応時間が大になるという傾向は、初級部全体と高級部においてみることができ。しかし、中級部と特に大学の場合はこれとは逆の現象を示している。この背景に関する問題は今後の研究で

明らかにしていきたい。

c. 大学生の対比

① 在日南朝鮮留学生との対比 朝鮮大学生は日本語、在日留学生は朝鮮語がそれぞれ第1言語である。

TABLE 13 で示したように「色彩カード」による朝鮮語反応時間は、朝鮮大学生は25.0秒、在日留学生は22.8秒、日本語反応ではそれぞれ20.8秒、24.3秒であった。

「KS-KR」に要した時間は朝鮮大学生 (31.9秒)、在日留学生 (31.4秒) でその差は0.5秒であった。したがって、この両者間における朝鮮語の刺激・反応テスト上の差はほとんどないと考えられよう。

「言語/色彩」値は、朝鮮大学生が120.0、在日留学生が106.5で在日留学生の方が13.5小さい。

朝鮮大学生は刺激言語 (S) が朝鮮語、日本語に関

係なくその反応言語（R）が日本語の場合、在日留学生よりも「JS-JR」で2.2秒、「KS-JR」では6.1秒早い反応を示した。逆に、反応言語が朝鮮語の場合には在日留学生に比べ「KS-KR」で0.5秒、「JS-KR」では3.1秒多くの時間を要した。

TABLE 13 朝大生と在日南朝鮮留学生との比較

朝大生	R \ S	朝鮮語	日本語	平均	色彩
	朝鮮語	31.9	29.3	30.6	25.0
		153.1	140.4	146.8	120.0
日本語		25.4	30.5	28.0	20.8
		122.0	146.3	134.2	100.0
平均		28.7	29.9	29.3	22.9
		137.6	143.4	140.4	110.0

留学生	R \ S	朝鮮語	日本語	平均	色彩
	朝鮮語	31.4	26.2	28.8	22.8
		137.7	114.9	126.3	100.0
日本語		31.5	32.7	32.1	24.3
		138.1	143.4	140.7	106.5
平均		31.4	29.4	30.4	23.5
		137.7	128.9	133.3	103.0

注1) 被験者数は朝大生が21名、留学生が4名である。

② 日本の大学生との対比 日本の大学生との対比は、日本語内干渉（「JS-JR」）を通して行った（TABLE 14）。

TABLE 14 「言語/色彩」値の朝・日大学生対比

被験者	JS-JR		色彩	
	秒	値	秒	値
朝大生	30.5	146.3	20.8	100.0
日大生	29.4	148.0	19.9	100.0
(±)	+ 1.1	- 1.7	+ 0.9	± 0.0

注1) 日本大学生のデータは芳賀（1979）による。

注2) (±) = 朝大生を基準とする。

注3) 被験者数は朝大生が21名、日大生が7名である。

その結果、朝鮮大学生（30.5秒）が日本の大学生（29.4秒）よりも反応速度が1.1秒遅かった。

結 論

第1に、2言語併用過程で朝・日両言語間の「依存度」は習得された言語間に同じ水準で現れるのではなく、どちらか一方が「優位言語」として作用することが示された。ここでは言語内及び言語間での干渉の程度が各言語の習熟度によって左右されるものと考えられる。

第2に、異なる年齢期と場面で習得された2つの言語の併用者である民族教育を受ける在日朝鮮人子女の言語間干渉の度合いは、それほど大きなものではないことが示された。

第3に、2言語併用過程で言語干渉を規定する要因は本研究に限定して言うならば、第2言語の習得年数よりもその言語を習得しはじめた年齢期が相対的に重要である。

引用文献

- 芳賀 純 1979 多言語使用過程における言語干渉の分析（筑波大学『外国人と日本語5』pp. 78—98）
 芳賀 純 1984 二言語併用の心理—言語心理学的研究 16—43. 朝倉書房
 芝 祐順 他 1980 在外日本人児童の日本語語彙理解力に関する調査 東京大学教育学部紀要, 20, pp. 111—128)
 金 徳龍 1988 「在日朝鮮学生たちの二言語併用に関する心理学的研究」（印刷中）

付 記

研究にあたり貴重な御助力をくださいました筑波大学芳賀純教授、並びに朝鮮大学校民族教育研究所金沅卓教授、慎栄根先生、学友書房康昌勲氏に深く感謝致します。またさまざまな協力をしてくださった朝鮮学校の諸先生方と被験者のみなさま方に厚く御礼申し上げます。

（1989年7月3日受稿）